



1 南吉の生涯

新美南吉は、愛知県知多半島の東海岸にある半田町（現・半田市）で、大正二（一九一三）年七月三十日に、父・渡辺多蔵、母・りゑの次男として生まれた。本名は正八。父が好きだった講師の柳川庄八に由来し、生後すぐに亡くなった兄の名を継いだ。四歳で母・りゑを失い、二年後に継母・志んが来て異母弟の益吉が生まれている。八歳の時、叔父（母の弟）が死去したため母方の新美家の養子となり、戸籍上



半田中学校時代の南吉

は新美正八となった。養家で血のつながらない祖母と二人きりで過ごした寂しい幼年期の体験は、最晩年の「小さい太郎の悲しみ」のモデルになっている。

昭和六年、県立半田中学校を卒業後、岡崎師範学校を受験したが体格検査で不合格となり、母校の半田第二尋常小学校の代用教員を勤める。十七歳の南吉は、この時「ごん狐」を作り、子どもたちに実際に語って聞かせた。この年の一月に復刊した『赤い鳥』に、童話（鈴木三重吉選）と童謡（北原白秋選）を熱心に投稿し、「ごん狐」は翌年の『赤い鳥』一月号に掲載されたのである。中学二年頃から創作を始めた南吉は、日記に「悲哀、即ち愛を含めるストーリーリイをかこう」と記しているが、初期の代表作「ごん狐」には、この考えが反映している。「孤独な魂が愛を求めて奏でる哀切な響きの美しさ」とへいじらしく、優しく、ひたむきな「ごん狐のキャラクター」とが、作品



『赤い鳥』（昭和7年1月号）と、掲載された「ごん狐」

の魅力である。

昭和七年四月、東京外国語学校（現・東京外国語大学）英語部文科に入学。幼年童話を書き始め、北原白秋の勉強会に出席し、傾倒していたマンスフィールドの小説やミルンの童謡の翻訳、評論「バイロンについて」の執筆などを行っている。南吉がこの時期に出会った都会的・西洋的な文化は、後の創作活動の豊かな養分となった。結核の再発によって四年半の東京生活を終え、南吉は昭和十一年十一月に帰郷する。以後は半田で、美しい自然と素朴な人々に詩を見出しながら創作を続け、昭和十八年三月二十二日に、喉頭結核のため二十九歳七ヶ月の短い生涯を閉じた。

南吉の幼年童話は五十編ある。その内の約三十編は東京外国語学校四年生の昭和十年五月に書かれた。南吉が「いい兄さん」と慕っていた異聖歌（※）から、幼年童話集出版の話があったからだが、実現はしなかった。いずれも原稿用紙三枚ほどの短い話なのに、南吉が評論「童話に於ける物語性の喪失」（昭和十六年）で主張した物語性——「文体の簡潔、明快、生新さ、内容の面白さ」をもっている。人間と動物とのほのぼのとした交流を描く「こぞうさんのおきょう」「里の春、山の春」、アンデルセ

2 子どもを抱く哀しみ

ンを連想させる幻想的な「木の祭」「去年の木」、哲学的な「かげ」、意表をつく（反転する）結末が面白い「飴だま」「赤いろうそく」など、多様な世界が開花している。ナンセンスなおかしさがあり、幼い人の柔らかなくみずみずしい心に届く優しさで語られていて、教材やストーリーテリングに向く作品が多い。

幼年童話「でんでんむしのかなしみ」は、平成十年九月にインドで開催されたIBBY（国際児童図書評議会）世界大会でのビデオによる講演で、皇后美智子様が幼年期に心の支えになった話として言及され、



安城高等女学校教員時代の南吉

注目を浴びた（橋をかける『文藝春秋』）。へ人は誰でも悲しみをもっているのだから、自分で自分の悲しみに耐えないといけない」という南吉のメッセージは、子どもたちが生きることをつらく感じる時の心の支えとなる。南吉は、一貫してこのことを作品で書き続けた。

東京外国語学校卒業後、失恋・発病・失業という人生最悪の時期を経て、昭和十三年に県立安城高等女学校に就職。社会的・経済的にも健康面でも安定を得た南吉は、友人で満州にいた江口榛一から「哈爾濱日日新聞」という発表の場を与えられて、意欲的に創作を始める。昭和十四年から十六年にかけて、「久助君の話」「屁」「川」「嘘」などの子どもを主人公に内面を描く連作を発表。特に、学校ではおどけ者の兵太郎がとつくみあいの後で見せた寂しげな表情に驚き、久助が「一つの新しい悲しみ」を抱く「久助君の話」を重視していた。この作品で、南吉は、子どもの屈折した心（悲しみ・孤独・不安・懐疑・エゴ・劣等感など）に着眼し、新しい表現技法（子どもの内面を子ども自身に独白で語らせる手法）を試みて成功したからだ。（何ということか。いったい、これは誰だろう。なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。）とい

※白秋のまな弟子で「たきび」を作った童謡詩人。南吉童話を世に出すことに尽力した人。

うように。昭和八年に書かれた評論「外から内へ」での主張〈子どもの内側に入って子どもの五感で世界を捉えよう〉を、実作として結実させたのである。

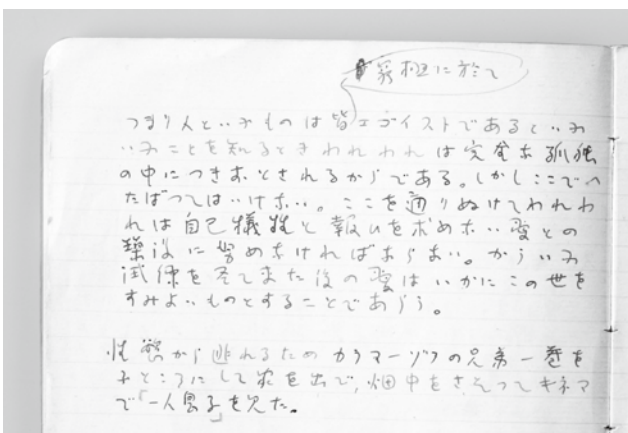
よく知っている人間の全く別の側面を見た五年生の久助君の驚き（悲しみ）について、大阪の小学六年生の子どもはアンケートで、「大人になる道を一步進ました重大な発見だ」「私たちがなやんでいることをといてくれる」と感想を書いていた。「久助君の話」は、子どもから大人への過渡期にある子どものアイデンティティ（自分が自分であること）を覚醒させる。

南吉は、安城高等女学校で、南吉の赴任とともに入学した十三歳の少女たち（十九回生）を卒業までの四年間担任し、熱心に日記指導をした。その中で、思春期の子どもたちが抱く悲しみ・喜び・悩み、物事に対する感じ方や考え方と実際に出会い、作品に反映させていった。

昭和十八年一月に、南吉はのどの痛みに耐えながら、再び子どもを主人公にした「小さい太郎の悲しみ」「疣」「狐」を書いた。この三作品は、それぞれ違った角度で、子どもが人間として成長していく過程で必要な人生上の認識が、完成度の高い洗練された文体によって造形されている。「小さい

が（世のため人のためになる生き方）」を模索する主人公として描かれている。こういうテーマを描くためには、社会と時代に関わって生きてきた大人の主人公を必要としたわけだが、南吉の名を不朽のものとしたこれらの作品は、子どもたちに（人はいかに生きるべきか）を語っている。

なかでも「おじいさんのランプ」は、主題・構成・表現のいずれの点でも児童文学としての完成度が高く、深い美しさがある。



昭和12年3月1日付の日記



安城高等女学校で担任した19回生との写真（中央が南吉）

太郎の悲しみ」は（泣いても消すことのできない悲しみ）を、「疣」は笑いを織りこみながら（悲しみに耐える力）を描き、心の面で困難な時代を生きる子どもたちへの励ましとなっている。それに対し「狐」は、初期の「ごん狐」「手袋を買いに」と中期の久助君シリーズの融合形で、祭りの晩に新しい下駄をはいたために、友だちから狐が憑いたと疎外されて悲しむ文六を母親が

十三歳の少年で孤児の巳之助は、つねづね身を立てたいと思っていたが、（自分のための立身）が（人のため）にもなるように描かれている。最初のランプ屋では、「お金ももうかったが」自分の村の暗い家々に「文明開化の明るい火を一つ一つとしてゆく」のが喜びでもあったというように。そして「青やかな光」の「花のように明るいガラスのランプ」は、商品以上に美への憧れと文明の象徴であり「希望のランプ」として存在する。電気が登場すると、「世の中のためになる新しいしよばいにかわるうじゃないか」と、巳之助は本屋になる。電気屋ではなく本屋になったのは、「字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ」という思いからであるが、物質文明以上に精神文明の大切さを主張しているところに、主題の深さがある。

この作品の美しさは、大野の町で初めて見た「出合いのランプの明るさ（希望）」が、電気の登場によって暗く屈折（絶望）した後、半田池での光のフィナーレ「別れのランプの明るさ（煩悶をくぐりぬけた後の希望）」へと発展していくところから生まれてくる。巳之助の人間としての成長の過程が、明と暗の対照法で描かれているのだ。半田池のまわりの木につるしたなつかしい

無償の愛で包む物語である。南吉は創作活動の最後に、母という最も身近な大人の愛に守られた子どもの（寂しさ・悲しみ）を描き、安心感のある世界（子どもにとって何が大切な）を提示した。「狐」はまさに（哀のある愛のストーリー）である。

3 無償の愛に生きる大人の主人公

南吉は人生最悪の昭和十二年に、思想の根幹となる次のような認識に達した。

「人といふものは皆窮極に於てエゴイストであるといふことを知るときわれわれは完全な孤独の中につきおとされる」が、「ここへたばつてはいけない。ここを通りぬけてわれわれは自己犠牲と報ひを求めない愛との築設に努めなければならない。かういふ試練を経て来た後の愛はいかにこの世をすみよいものとするのであらう」（日記 昭和十二年三月一日付）。

そして、病気が悪化して死を覚悟する昭和十七年四月と五月に、大人を主人公にした「おじいさんのランプ」「牛をつないだ椿の木」「鳥右衛門諸国をめぐる」など六編を集中的に書く。これらの作品は、（孤独を通りぬけて無償の愛を）という思想

ランプをバリーンと割った時、巳之助の目には涙がうかび、ランプへの愛は哀に変わる。人物の動きの中に自然描写を織りこみ、視覚と聴覚を響きあわせて、詩的な「光の世界」を創り出している。

構成は、全体を現在↓過去↓現在という回帰型にすることで、孫の東一君が祖父の若かった時間を共に生き、がみがみ叱るだけの老人だと思っていた「おじいさんはえらかったんだ」と感動して認識を変え、本屋を営む自分の家の来歴を知るという巧妙なプロット（因果関係）になっている。それは作品を味わい深くしている。

* * *

南吉文学の背後には、静かで青い海に囲まれた柔らかな緑と光の豊かな知多半島が、南吉の精神風土となつて広がっている。その基調には、のびやかな明るさ、清冽さ、透明感があるが、それは郷土の美しい自然から生み出されたものである。

たに えつこ

一九四四年、徳島県生まれ。大阪市内の公立小学校教諭、梅花女子大学教授などを経て、同大学名誉教授。著書に「新美南吉童話の研究」（くろしお出版）「まど・みちお 詩と童話」（創元社）など、編書に「新美南吉詩集」（ハルキ文庫）などがある。